vol.5

文化人 末松謙澄

「日本文化を欧米に紹介
～不平等条約改正に貢献～」

明治新政府の最大の外交課題は幕末に欧米列強と結んだ不平等条約の改正（治外法権の撤廃、関税自主権の回復など）であった。明治４年岩倉具視を団長とする遣欧使節団が条約改正の予備交渉にあたるが失敗。当時の欧米列強には丁髷(ちょんまげ)、袴姿で刀を差した使節団は奇異に映り、未開の国からの珍客を物見高い群衆が遠巻きにしたと報じられている。末松謙澄が英国に渡ったのはそのような時代であった。多くの英国人にとって日本は中国の一部あるいは属国というほどの認識であった。

これを正し祖国日本の名を拡めたい謙澄は英国着任の翌年(同12年）はやくも得意の英語で英文「成吉斯汗(ジンギスカン)」を表し刊行する。これは日本の一部地方に伝承されるジンギスカン＝源義経同一人説に材をとったもので、英国人の意表を突く作品であった。謙澄の負けず嫌いと明治の留学生が国を背負った使命感と気概がうかがえる作品でもあった。

現在のわれわれから見れば、英文「成吉斯汗」と後年謙澄が編纂した精緻な歴史書「防長回天史」が同一人物の著作とは思えないほどの落差を感じる。しかし謙澄の渡英当時の日本に対する低い評価と誤解に対する反発もあり、日本の存在に目を向けさせたい一心で「成吉斯汗」のような意表を突く作品を書いたものと思われる。

これに先立つ明治11年、在英公使館は日本を欧米にアピールする絶好のチャンスに恵まれる。欧米人の手を借りず造った純国産軍艦「清輝」が日本人だけの操船でポーツマスに到着。公使館は東洋から欧州に渡った最初の軍艦「清輝」を、テムズ川の河口に回航させ英国政府高官など約500名を招いた大レセプションを行う。日本人は自分達の手でこんな軍艦を造り、七つの海を越えてやって来たのだ。アジアの未開民族ではないのだという自負心を示すとともに実物を見せることにより、大きな成果を上げることが出来たのである。渡英の際、謙澄の船はインド洋で訓練しながら英国に向かう「清輝」を追い抜き、ロンドンに着いてからは公使館員として活躍する一方、「清輝」の井上良馨艦長を案内するという重要な役目を担うのである。

その後、明治15年謙澄は日本の古典「源氏物語」を英文に訳して出版するという画期的な仕事を成しとげる。英国人にとって最高の文学はシェイクスピアであるが、日本にはもっと古く記紀・万葉の時代から数多くの優れた文学が残されており、なかでも王朝文学の最高傑作「源氏物語」は世界に誇るべき文学である。是非英国人にも読んで欲しいという謙澄の強い思いで英訳されたのである。これは「源氏物語」48帖のうち17帖までを一冊にまとめたものであるが、西欧人はこのとき初めて日本文化の粋と紫式部という優れた女流作家の存在を知ることになる。アーサー・ウェイリーによる源氏物語の英語全訳が出版されるほぼ半世紀近く前に謙澄の源氏物語は出版されたのである。

このように日本と日本文化を深く愛する謙澄は得意の英語で世界に強くアピールし続け、明治・大正期の日本の国際的地位の向上に大きく貢献する。明治27年遂に日英通商航海条約が締結され、他の欧米諸国もこれに続き、40年近く続いた不平等条約が改正されていく契機となるのである。

（文化人末松謙澄を考える会　濱田輝夫）